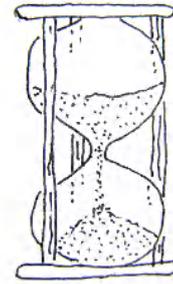


* K色に染まって

時間とは不思議なものです。たとえ10分でも、待つ時間というものは長く、何か実体があって、手ごたえがあるように感じます。でも、過ぎ去った時間というものほど頼りないものはありません。昨日の時間でさえ捉えどころがなく手元には残っていません。それは、降り敷いた森の落ち葉の堆積のように、はかなく朽ちてやがてその多くは記憶から薄れて行きます。



社会人になり、私にとっては一つきりの企業に身を置いて36年が過ぎて行きました。人生の大半をそこで過ごしたことになると思います。そして、今やこの時間もその不思議な時間に属してしまいました。ただ一つの会社の風土、文化の中で日々の暮らしを続けてきたこととなります。今では、すっかり会社色に染まってしまったように思います。それは一方では、依存できる場所があり、心やすまり、頼もしくそして誇りに思える日々でした。現在でもそこに居られたことを感謝しています。しかし、別の会社から眺めてみると、私の行動や言動は独りよがりの非常識であったかもしれません。考えてみると、私の色はこの会社のカラーだけに限ったことではありません。この世に生まれてからいつの間にか身についた思考、習慣など、人はいつの間にか固まった自分の殻から抜け出すことができなくなり、自分の世界からしか物事を見、考えることができなくなります。すなわち、私は入社以来身に付けた会社のコンセプトを基準にして社会生活をしてきたこととなります。他の会社あるいは行政関係の方との打合せで、相手の主張がどうしても理解できず、こちらの考えを通そうとしたことが度々でした。それでも何とか私が属した社会、とりわけ会社の文化、企業倫理が絶対のように行動できたのは、かなりのことが許容された戦後の高度成長時代であったからではないかと思えます。時代は変わり、移り行きます。もう遅いと思わずにさまざまな色を見て行きたいと思えます。

＜いつも新鮮な目で広い視野で物を見る。まず話をよく聞き、相手の立場に立って考える。・・・＞

* 初めての現場

「スコ持って来い」、「あとネコ三杯」、先輩からの指示のことばが分からなくて困ったことを同窓会で話し合ったことがあります。分かってみると何でもないことでした。「スコ」はスコップのこと、「ネコ三杯」はコンクリートを一輪車（猫車）で三回運べということでした。入社して初めての現場でした。すべてが目新しく分からないことばかりでした。現在までに学んだこと、大学で得た知識もあまり役に立たない。そうだ、何もかも教えてもらおう。そう考えてから毎日、2歳年下の入社2年の先輩のMさんに一日中くっついて現場の中を走り回りました。いつの間にかMさんのしぐさから、Mさんがこれから何をしようとしているのか分かるようになりました。その都度、必要な器具をそろえ、次の作業の準備をし、そして、あらゆることを教えてもらいました。工事の段取り、使用機材の調達、電気の配線、溶接、鉄筋の組立て、番線による足場の組立て。これらの作業の注意点、工

具の扱い方。鉄筋組立ての結束は、方向を交互にすると強くなること。強く締めるとなまし鉄線が切れてしまうのでハッカー（鉄線を巻きつける工具）の力加減にコツがあること。わからないことは作業員からも学びました。ワイヤーロープの加工。巻き上げのウィンチの操作法。今では労働安全の違反となることも作業員と一体となって進める日々でした。いくつもの失敗を重ね、現場に迷惑をかけ、怒鳴られながらも少しずつ身についていきました。やがてこれらが現場を指揮・運営する自信となり、次の計画の基礎となっていきました。

<初めが肝心、聞くは一時の恥。>

* Mさんの決断

湧水のある場所の掘削作業でした。Mさんは自分の方法で作業が進められると主張し、主任と私は別の方法を挙げて意見が対立しました。Mさんは強引に準備して作業に取り掛かってしまいました。掘削した粘土と湧き出した水が混ざってドロドロの中での作業。排出する量は湧水が増えればそれだけ多くなります。しかし、Mさんは作業員を指揮して懸命に作業を進めます。果てしない泥との格闘は深夜に及びました。しかし、やがて予定の仕上げ盤が広がり、夜明け前にはポンプを据えて作業は完了しました。数年後のことでした。Mさんは当時のことを述懐して次のようなことを話してくれました。自分のやり方を主張したが実は自分自身も確信は持てなかった。あとは意地でやったのだ・・・と。確かに、やってみないと分からないことがあります。そして、ときには分からなくてもやらねばならないこともあります。そうして、やると決めたらさまざまな工夫をしてあらゆる努力をしてやりとげなければなりません。このことがあってからその後、工事のやり方の決断を迫られたときには度々このときのことを思い出しました。

同じ現場でのことでした。夜間の短時間に鉄道線路を取り外し、新たに大きな橋げたをセットして始発の電車を通す工事をしました。机上での検討ではどうしても始発電車に間に合いません。間に合わないときのために、代替輸送のバスを用意して作業が始まりました。作業が始まると現場は大変な雰囲気包まれ、作業員の顔つきが変わり、そのきびきびとした作業の様子に驚かされました。日頃動作が鈍く文句の多い年配の篤工（とびこう）が、細い仮桁の上を軽々と渡って作業をする様子にはびっくりしました。一つの目標に向かって現場の全員が一体となって全力をつくす場面はいつまでも忘れられない思い出です。

<初めからやれないと思わずにできる方法を考える。>

* 無くなった池の水

工事のため、池の水を抜いて水位を2m下げることになりました。こちらで責任を持って樋の栓を管理するというので、自治会長さんの了解がとれました。朝に栓を抜いて排水が始まりました。昼過ぎに見に行くと、まだ予定までの水位にはなっていません。夕方になったので、作業責任者に、帰るときに樋の栓をして排水を止めるように指示すると、もう止めましたというのでその日は安心して帰路につきました。ところが、翌日の朝になって、池の水が空になっているということで大騒ぎになりました。池まで行ってみると、

確かに池の底が見えて水はありません。当然、自治会長さんの怒りは大変なものでした。折りしも、田植えが近づき貴重な水です。許可した自治会長さんにしても地区の人たちに説明のしようがありません。神戸市の課長さんと謝りに行ったところ、とりあってもらえない。秋まで工事を中止するようと言われました。私はそれから毎日自宅に謝罪とお願いに伺いました。

工事の中止は、私自身は勿論のこと、市にとっても働いている多くの作業員にとっても大問題です。状況を説明して工事の再開をお願いし続けました。そして、6日目になって許しを得ることができました。次の日から、別の池や川の水を一つ一つの田に給水するポンプ作戦が始まりました。

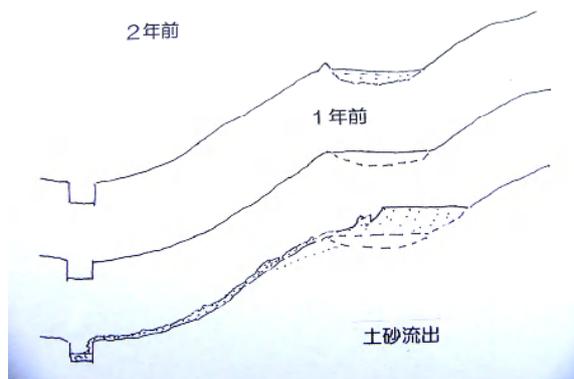
実は、作業責任者も作業員に池の樋の栓をするように指示しただけで、自らが確認していませんでした。人は信じなければなりません、人は忘れることもありミスをおかすということも事実です。しかし、この一件で自治会長とは大変親しくなり、長い付き合いとなりました。

<重要な事柄は自らが確かめる。誠意を持って事後処理に当たれば相手の理解、大きな信頼を得られる。>

* 池ごと流れる

大きな声で私を呼びながらMさんが事務所に入ってきました。大変なことが起きたようです。説明を聞くゆとりもなく一緒に現場に駆けつけました。私の目の前の斜面の広い範囲の土砂が溶岩のようにゆっくりと動いています。そして、完成したばかりの大きなコンクリート水路の中に、まるで氷河の先端が海に流れ落ちるように土砂が落ち込んでいます。更に、その土砂は勾配のきつい水路を下流に向かって流れています。土砂が流れる……。土砂の表面の大きな木片は勿論のこと、大きな石まで土砂と一緒に動いています。水路に流れ込んだ土砂の流れは100m近くにもなっていました。

目の前の恐ろしい光景に呆然としていましたが、しばらくして、以前、斜面の途中に小さな溜池があったことを思い出しました。2年前に溜池の土手を切って水を抜き、乾燥させました。翌年、表面が硬くなってブルドーザがのっても特に異常はなかったので更に薄く土を盛って整地をしてしまいました。見た目には過去にそこに溜池があったことなど誰にも分からなくなっていました。そして、今回その上にかなり厚い盛土をしたのです。溜池の表面を覆ってしまったために、池の底のヘドロの水分が十分抜けずに、盛り上げた土砂の重みに耐え切れず流れ出したのです。通常、盛土するときはその場所の調査をしてから工事をするものです。ボーリング調査をして土質を確かめることもしばしばです。ましてや、数年前前から見ていた現場でした。まことに迂闊でした。それにしても土の怖さを思



い知らされた事件でした。幸にも水路には水がなく、土砂の流失範囲が工事現場内であったので、周辺農家に迷惑をかけることなく処理ができました。以後、「土は怖いものだ」と肝に銘じて仕事をしてきました。

＜何事も過去の履歴を調べてことにあたりよう。＞

* やけどとして初めて分かる熱さ

処理場のポンプ室の工事のことです。深く掘削するので事前に地中にコンクリートの壁を施工しました（連続地中壁）。工事期間がとても短く、狭い場所に施工機械を3台も入れて、しかも昼夜連続の作業となりました。私にとっては初めての工事の種類です。そこで、京都地下鉄の現場所長のNさんを訪ねて工事のポイントについて話していただきました。目に見えない地中に施工する連続壁は、連続して隣に造る壁と繋がらなくて隙間ができることがある。壁が連続していなければ、壁で囲った中の土を掘削するときにその隙間から外周の水がふきだし、さらに土砂まで流れ込んできて工事ができなくなります。「田中君、少しでも水が出てきたらそこに土砂を放り込んで押さえるんだ。それでも駄目ならとりあえず水を入れてから処置を考えるんだ。内側から細工をしても水は止まらないよ。」とNさんに助言されました。せっかく掘ったところを埋めるなんて……。掘削工事が進み、あと数mで計画深さというときに、壁と壁のわずかな隙間から水が出てきました。検討の結果、隙間も小さく水量も少ないので急結セメントで隙間を押さえながら掘削を進めました。

昼休みのことでした。Yさんが事務所の階段を足早に駆け上がってきました。出水して砂が噴出し、このままでは中のブルドーザが水没してしまう。あわてて現場に走って行きました。やっと掘り下げたところに水と砂が流れ込み、しかも見ている目の前で水面が少しずつ上ってきます。それから止水対策をして水を汲み上げるまでの一週間は巨大な水槽になっていました。その後、同じような工事では失敗をすることはありませんでした。

しばしば失敗や事故事例が紹介されますが、それでも同じ失敗が度々伝えられます。私も、Nさんから事前に注意するように聞いていたのに、自ら経験するまでその意味がほんとうに分かっていなかった。人間は自分で熱い湯をのんでみないと、自ら経験してみないとその熱さがなかなか分からないようです。

狭い賃貸住宅に住んでいた頃、長女に火傷をさせないためにわざと少し熱い湯沸しに手を触れさせたことがあります。その時には長女は激しく泣きましたが事故なく成長しました。最近になってこのことを思い出し、このやりかたが正しかったか釈然としなかったので幾人かの人に話してみました。そんなとんでもないことを・・・と、批判的な人も多くいました。長女は実に合理的なクールな考え方をし行動をします。私のこのような行為や考え方が長女の性格を決定付けたのかとも思うと責任を感じます。



私の子供の頃はよく戸外で遊び、木に登って落ちたり、がけを滑り落ちてすりむいたり、ナイフを使って指を切ったりしました。そのときの痛みが経験となって次には失敗が少なくなり、たいていのものはうまく扱えるようになりました。最近の子供はけがをしないように事前に手厚く保護されています。これでいいのかなとよく思います。

工事現場を任された当初は、致命的でなく損失が少ないと思われるときは部下の失敗を干渉せずに見ていることにしていました。しかし、時代の流れとともにそのようなゆとりが許されなくなりました。時間も心にもゆとりが無くなってきたように思います。

＜失敗経験が最大の教育＞

* 水中の墜落

N先輩は年齢を感じさせない活動家です。ダイビングにもよく出かけます。紅海でのダイビングの話の聞いたり、水中写真を見せてもらったこともあります。私も海は大好きです。近くの家でも、潜れば息を呑む光景に出会えます。2mも潜ると耳が痛くなるのでそれ以上深く潜ったことはありませんが、それでもウニを探ったり貝を探したりけっこう楽しむことができます。ときに、岸から急に深く落ち込んでいる岩場の水中から下を覗くと、下の方は次第に薄暗く、神秘的な果てのない世界を見るようで恐怖さえ感じます。

あるときN先輩から「水中の墜落」の話の聞きました。深く潜れば潜るほど水圧は大きくなります。するとウェットスーツの空気層も水圧で体積が小さくなります。そのままにしておくと、浮力が減って沈むことになります。沈めば更に水圧が増えて浮力が落ちることになります。レギュレータで空気圧調整をしないと水中の墜落が始まるということです。特に、あわててパニック状態になると危険なことになります。そこであわてず、レギュレータで空気圧をチョコッと調整してやれば浮上もできるし快適な潜水を続けることもできます。この話を聞いたとき、人生もおなじだなーと思いました。苦しいとき、悩んでいるときにチョコッと思いなおして、人生のレギュレータをチョコッと調整してやれば冷静に周囲を見ることもできるし、やがて浮上することもできます。一方、深く潜りすぎていると調整ができたとしても急浮上すると潜水病の危険もあるということです。このこともまさに人生によくある話です。これからもあたりの景色をゆったりと見ながら適切に人生のレギュレータを操作しながら生きて行けたらと思います。

＜ときどき自分を外から眺めてみよう＞

田中輝彦（彦爺）

「彦じいのつぶやき」から

2006. 7. 1

田中輝彦（彦爺）

1940年但馬八鹿に生まれ、雑貨店の次男として成長、八鹿高校から京大土木に進む。縁戚に土木の神様を祀る出石神社。鹿島建設にて施工技術者として活躍。多くの工種の工事に従事、その取り組みは原理原則に従い、自然の力に謙虚に立ち向かった。2冊目の著書の「重力の達人（岩波ジュニア新書）」に自然観がよく著されている。

人柄は謙虚過ぎであり、特に女性に優しい。現場では社員・作業員に対しても分からないことは、謙虚に聴き、決断は自ら行い実行する。施主の信頼は抜群、賞も獲得している。彼を知ると多くの方は少し不安になるが、結局こっそりファンになる。「権力の不達人」であり、還暦からの神戸大学非常勤講師がお似合い、また奥様の絵付けの陶芸では、毎年催される展示会では行列ができる。

処女作「土木への序章（鹿島出版会）」は、20年近い今でも書店に並ぶ、「土木」を世間に説明した先駆的名著であり、これらにより最近創設された土木学会誌シニア編集委員にも任命された。

最近の「彦爺のつぶやき」は名前のごとく輝きを増し、少し「不安」を覚え、また永遠の「ファン」であることが誇りに思える。彦爺には「人生の達人」は手に届くところにあるようだ。

（池亀建治 記）